
科学と正義となまけもの

Kakki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学と正義となまけもの

【Nコード】

N4102Z

【作者名】

Kakki

【あらすじ】

科学の発展した世界で18歳という若さで軍人として戦争にでる若者たち。

彼らはこの戦争を通して

恋や友情、そして正義について悩むことになる。

自分たちが戦っている意味・・・

「正義」の意味・・・

人の心・・・

彼らがそれらの向こうに見えるものとは!?

プロローグ（前書き）

初投稿です。

暖かい目でご覧になってください。

一応ジャンルは恋愛、コメディ、シリアス要素を含んだSFものにしたと思います。

プロローグ

5000年人類は驚異的な科学の発展を迎えた。

日本に人類の進化した存在ともいえる、桁外れの頭脳を持った科学者が現れたからだ。彼が作り出すものは今までの常識をことごとく壊していった。彼からすれば科学でわからないものはなかった。

日本は一気に他の国を抜き去り日本の科学力は世界を置いて行った。しかし、その肥大した科学は日本を凶悪なものへと変えた。怖いものなしとなった日本はその桁違いな科学力を持って他の国へ戦争を仕掛けだしたのだ。

特に兵器の開発を進めた日本を世界で止められる国はなかった。やがて日本にすべての国が服従せざる負えなくなった。

実質世界は一つの国となった。

他の国を蔑み、奴隷のように扱う日本は悪魔と化していった。暴走した科学の恐ろしさを知ったその科学者は自分の科学力を集体させた兵器「オロチ」を開発し、自らの力で日本を滅ぼした。

そして、世界を新たに4つの国へと分けた。

抑制しあふ敵がいたほうが互いに平和でまた切磋琢磨しあえると思っただからだ。

科学者が思っただ通り、2000年は小さな小競り合いはあったものの平和に過ごすことができた。

だが、今その均衡もやぶられようとしていた。

世界観

今、世界には4つの国がある。大陸は戦争の結果、1つしか残らなかった。

そしてその4つの国は高い壁によって4つに分割されていたためにほとんど鎖国の状態ですつと均衡していたのでそれぞれ違う形で科学の発展を遂げた。

生物学の発展を遂げ、キメラなど新しい生物兵器の開発に力を入れ、研究のためなら犠牲をいとわないことで知られる「ハザード国」大森林ヒヤリオンを中心とした広大な土地が特徴的で見ただことないモンスターと呼ぶべき生物が普通に歩いている。また、深い森の中にこの国の中枢である秘密都市「帝都ダングルス」があるため、ほかの国は中枢であるその都市の正確な位置を把握できてない。

地球自然学や宇宙学の研究にたけ、火山の噴火や地震の誘発、植物の成長などを自由に操ることに成功した「ヤムド・アポロン国」自然を操る技術を手に入れたことにより、領土面積が4つの中で一番小さい割に食料や資源が豊富。いろんな場所に観測所がある。中枢都市は城壁に囲まれている「城都シンボル」。城下町は商業区、工業区、居住区に分かれていて、その中心にシンボル城がある。またペリウス教という特有の宗教が広がっていることで有名。

機械工学の発展を遂げ、機械人形や人型兵器「機神」の開発に成功

し、兵器の開発にもっとも長けていると言える「エルモア王国」
人口がほかの国の十分の一しか満たないこの国は機械人形の開発に
成功したことにより兵力の差を補った。また人が操縦する「機神」
は莫大な軍事金を必要とするため、大量生産はできないが一機で戦
局を左右するぐらいの戦力を持つ。中枢都市は「王都キングス」で
あるが、この都市は都市であるとともに要塞でもある。また都市ご
と移動が可能で6本の巨大な足で動く

そして、新しい物質の開発を中心とする新分野、創造科学を開拓し
た「ワノクニ」

この国は実質かつての日本を継いだ形となる。この国の最大の特徴
は開発した物質によって作り出された兵器「ファイ」を武装した軍
隊「紅蓮十字軍」である。この軍は唯一エルモアの機神と対抗でき
る軍隊と有名で、戦力としてはトップクラスを誇る。中枢都市は紅
蓮十字軍本拠地でもある「軍都ヤマト」。

今はこれらの国を分ける壁は破壊され、国境として、どこの国にも
属していない地域「ノーバディ」が広がっている。

登場キャラクター

登場キャラ多いので最初に主要キャラ紹介します。

十番隊メンバー（全員18歳）

レン

十番隊隊長。男。175センチ。大酒飲み。（注 酒は二十歳から）

基本的にめんどくさがり屋だが実力と統率力はある。

ボサボサの黒髪。眼がはつきりしていて美形だがどことなく猫に似ている。十番隊で唯一軍服を着ている。

「最初からいたらつかれるだろ!!!」

キョーカ

レンに使える人間型機械人形。170センチ。一応女。常に無表情・無感情。だがレン直伝のボケを使う。

黒の長髪。常にメイド服。

「イエス、マスター」

ジャック

ヤンキーのような見た目と言動をする男。声がでかい。180センチ。

茶髪で横をそっていて前髪を右側だけ垂らしている。黒いシャツに白いパンツをはいていていかにもヤンキー。

「うつせえんだよ！……！てめえら！……！」

ミラ

おっとりしていつもニコニコしている女の子。160センチ。薄い金髪でところどころクセっ毛ではねている。落ち着いた印象の服を着こなす。

「みんな見えないね」

サイト

クールな印象を持つ男。しかし無口ではない。ミラに好意を持っているが気づかれない。185センチ。肩にかかるぐらいの茶髪。シャツにネクタイを締めた恰好をしている。

「……バカばかりだな。ここは……」

マリヤ

おどおどして泣き虫な女の子。だが守ってやりたくなる感じで男からは人気。152センチ。サイトが好き。茶色のふわふわした長髪。セーラー服のような服を着ている。

「わっわたしですっ！……！」

ディアス

どこか貴族のような雰囲気を持つ男の子。ナルシスト。自分が許した人以外が触るのを嫌う。168センチ。七三に分けた金髪。白いスーツを来ている。

「君が僕に触るなあ!!!!」

セシリ

チャライ男の子。とにかくチャライがツツコミがついじられ役。170センチ。

茶髪の髪を盛っている。服装はもちろんチャライ。

「俺ならどおっすか!？」

ジャステイア

ヒーローのような振る舞いの男。普段もヒーロー番組の仕事をしている。子供に人気。178センチ。

黒の短髪の爽やかな男。服装はライダーズジャケット。

「はっはっは!!!!この世に悪は栄えない!!!!」

ユリエ

古風な女の子。男らしい口調で話す。十番隊のまとめ役。170センチ。

黒の長髪を後ろで束ねている。服装は武士の鎧のようなもの。

「私たちは軍人なのだ。」

キャラ多くてすみません・・・

第一話 十番隊

（紅蓮十字軍本部）

ガヤガヤと軍服を着た兵達が行き交っている廊下で軍服を着ていないひとときわ目立っている集団がいた。

周りの兵はそれを見てひそひそと話している。

「おい、あれ十番隊だぜ」

「ああ、あの隊だけで機神を何体も相手できるらしいな」

「見た感じたただのガキなのにな」

そんなことを話していると後ろから先輩らしい兵が近づいてきて、話しかけてきた。

「お前らまだ十番隊と一緒に戦場に出たことないだろ。出てみればわかるさ。あいつらは桁違いだ。中には一人で機神を相手できるやつもいるらしい」

その話を聞いた兵達は驚きを隠しきれない。なぜなら機神はたいいてい隊の半分以上の兵を使って相手をするからだ。それを一人で相手するとは彼らにとって人間とは思えないからだ。

「それなら軍服が違ってても文句言えないな」

「ああ、あと武器が違うのもな！」

通常の兵は筋力補助とダメージ軽減の能力を持った軍服にビームシールド、ビームセイバーという装備が普通だ。
しかし、十番隊は軍服ではなく特注服を着ていて、武器もそれぞれ違う。

その訳を話すためにまた先輩が口を開けた。

「それはな、ジュードさんがかかわっているらしいぞ」

ジュードとは、十番隊の指揮官であり、紅蓮十字軍副長つまり紅蓮十字軍ナンバー2である。

「やつばすごいなあ十番隊は。早く実力を見てみたいなあ」

「ああ、そうだ・・・」

言葉の途中に警報が鳴り響いた。

「エリア313にて敵戦艦3機潜入を確認。兵はエルモアで機神も出動している模様。至急、3番隊、6番隊、10番隊は戦場へ向かわれたし。ワープポイントは4 / 5 / 6 / 7番ゲートを開通。繰り返し返す・・・」

「おい、うわさをすればさっそく来たじゃねえか。頑張ってこいよ
!!--!!」

「了解」

兵達はあわただしく戦場へ向かうのだった・・・

戦場エリア313

戦場には似合わない恰好をした集団が戦艦が来るのを待っていた。

「まだ、レンとキョーカは来てないのか」
鎧を着た女がイライラしたように言う。

「まあまあ、ユリエちゃん。いつものことじゃないっすか」
いかにもチャラ男がユリエをなだめる。

「はっはっは！！！そうだぞ！！正義は遅れてやってくるものだからな！！！！」

「ジャスティア声でかいつす」

するとジャスティアよりもさらに大きな怒声が響いた。

「うつせえんだよ！！！！！！てめえら！！！！！！」

その大きな声に横にいた女の子がびくつと肩を揺らす。

「ジャック！君ってやつは・・・マリヤさんがびっくりしたじゃないか」

すると耳についている通信機から声が聞こえてきた

「・・・遊んでいる暇はないぞ。」

おっとりした声が割り込む

「敵さん来ましたよ」

「了解。サイトとミラは狙撃を、セシリ、ディアス、私は左方から。ジャスティア、マリヤ、ジャックは右方から攻め込むぞ」

「了解」

くとある一室

今戦いが始まるうとしていたときある男がベットから滑り落ちた。

「うーん……いてえ……」
まだぼんやりしている眼をこすりながら起き上り眼を開けると目の前にメイド姿の女が立っていた。

「お前、いつからそこにいた」

女は恭しく答える。

「ちょうど2時間58分前でございます」

「起こせよッツ！！！！」

メイドは一礼して

「申し訳ありません、マスター。起こそうと思いましたがマスターの寝顔を見ていると、どうしてもよくなり起こすの断念いたしました」
「俺の寝顔、関係なくね？」

メイドは顔をあげて

「そんなことよりマスター。先ほど戦闘の要請がきましたが、どうしますか？」

男は髪を掻き上げて、ため息をついた。

「いつもどおり、ゆっくり準備しようぜ」

「イエス、マスター」

第二話 狙撃

「戦場エリア313」上空

上空には相手戦艦から1キロ離れた地点の空に二人乗りをしているスカイバイクがあった。

「・・・まずは主砲を壊すか」

そういうとその男がはめていたバングルが何倍もの大きさのスナイパーライフルに変形した。

これこそがワノクニの発明した圧縮兵器「ファイ」である。質量をそのままで圧縮させることで持ち運びが容易になった。

また、重力制御装置も付けているためどんなに重い兵器も持ち運び可能である。

「標準設定、目標主砲、銃弾ボンバーに切り替え、破壊活動に移る」

そういつて引き金を引こうとした時だった。背中にやわらかい感触を覚えた。

「みんな、見えないね」

ミラがサイトの後ろから寄りかかって前を見ようとしていた。

サイトは少し顔を赤らめながら言った

「・・・ミラ、標準がずれるから寄りかかるな」

ミラはアッと気づいた様子であわててどけた。サイトは少し名残惜しかった。

「ごめんねえ、私も前見たかったの」

サイトは気を取り直して標準を定め、引き金を引いた。銃弾はまっすぐ飛んでいって、主砲の筒の中に入った。すると主砲は大きな爆発を起こして大破した。続けて、サイトは引き金を引き続け、ほかの戦艦の主砲も次々と壊した。

「・・・普通の銃弾じゃ傷もつかないからな。エネルギー弾を主砲の中で爆発させてもらった」

しかし、1キロ先の動く戦艦の主砲の筒の中を狙うのは至難の技だがこの男は簡単にやってのけた。

後ろでミラが拍手をしていた。

「おみごとだね、サイトくん」

「・・・人に関心してる場合じゃない。次はお前だ。戦艦がこつちに標準を合わせてきている」

するとミラは手を挙げて

「はい、いくよお〜」

と言って、ミラはバイクの上に立つと、ネックレスが大きな二つの大砲のようなものになった。そして両肩に固定された。

「後方にブースターセット、高出力エネルギー砲充電開始！！！！！」
すると、相手の戦艦から無数のミサイルが飛んできた。

サイトが舌打ちする。

「しっかりつかまつてる、充電どれくらいかかる？」

ミラはサイトの肩につかまりながら答えた。

「もう少しかかるかなあ〜」

スカイバイクがかなりのスピードで宙を舞っているが、ミサイルはその動きについていき追いついてきた。

サイトはまた舌打ちをする。

「・・・仕方ない、あれを使うか。試作品だが・・・」

そういうと、スカイバイクを反転させて、飛んでくるミサイルと向き合った。

そしてサイトはまた、スナイパーライフルを構えた。

「銃弾スプラッシュに切り替え、目標エネルギーミサイル」

そういつて引き金を引くと、無数のレーザービームが散弾銃のように飛んでいった。

銃弾はミサイルに当たり、すべて爆破された。かなりの爆風がおき、スカイバイクがあおられる。

「・・・ミラ、大丈夫か？」

「うん、平気だよ。それより、反撃開始だよ」

サイトは軽くうなずき、バイクを戦艦のほうに向きなおした。

「目標戦艦1機、ブーストによる固定開始」

ミラの後方にブーストが噴き出した。それと同時に二つの大砲の先も光りだした。

「行くよ、はっしゅ」

力のない掛け声とは裏腹に巨大な二つの光線が轟音をたて、戦艦の横に当たった。

砲撃の当たった戦艦は地上へ墜落していく。

「やったあ、戦艦1機撃墜」

サイトは微笑みながら、ミラの喜ぶ様子を見ていた。

すると、残っていた戦艦から機神が出てきて、こちらにエネルギー

砲を撃ってきた。

「・・・飛行型もあつたのか」

サイトは飛んでくるエネルギー弾をよけながら無線に手を伸ばした。

「こちら上空、飛行型機神が現れた。応援頼む」

すると、無線からユリエの声が聞こえてきた。

「了解、やつをすぐ向かわせる」

そこで無線は切れたが、サイトはだれが来るかわかっている様子だった。

ミラはサイトの肩から顔をだし、尋ねた。

「サイトくん、あの人がどれくらいで来ると思う?」

エネルギー弾をよけるのに精いっぱいだが、サイトはため息をしながら答えた。

「あいつのことだ・・・」

もう来るだろう・・・」

すると下からものすごい勢いで来た、スカイバイクが機神にぶつかった。

驚いた機神のパイロットは10メートルくらい飛ばされたが、すぐに体制を立て直した。

「くそっ！！！あつちに気を取られて下から来ていたのに気付かなかったぜ」

機神のパイロットは悔しそうにそういうと改めて今ぶつかってきたバイクを見直した。

すると、1人の男がバイクの上に立っていた。

「はっはっは！！！助けに来たぞ！！！私が来たからにはもう安心だ！！！！」

それを見たサイトは頭を抱え、ミラは苦笑いしていた。

「・・・ジャステアはいつもああだな」

「そっだねえ・・・」

機神のパイロットはなめられているような気がして、腹が立った。

「ぶざけやがって・・・くらえ！！！！」

今度はジャステアに向かって撃ってきた。

ジャステアは焦る様子なく、ベルトのバックルに手をあてて、叫んだ。

「変身！！！！！！！！」

するとジャスティアの体を光が包んだ。同時にエネルギー弾がジャスティアに当たって、バイクが大破し、煙に包まれた。

「ふっ．．．なめているからそうなるん．．．だ．．．？」

機神のパイロットが言葉に詰まりながら言った。
当たり前だろう。

エネルギー弾が直撃し跡形もなくなったであろう所の煙の中から全身をどこかのヒーローライダーのような恰好で身を包んだ人が自らの背中のジェットで宙に浮いているのだから。

「おっお前はいつたい何なんだ!？」

風でマフラーをなびかせてその人物は答えた。

「ジャスティアマン．．．」

正義のヒーローだあああ!?!?!?!?!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4102z/>

科学と正義となまけもの

2011年12月17日01時47分発行